

講演者プロフィール



エリック・パロット

1978年から建築家として活躍。パティマン・ド・フランス建築事務所にて建築家として活動後、1991年より歴史的記念物主任建築家、さらに歴史的記念物総監査官として従事。エコール・ド・シャイヨーで教鞭をとる。2021年よりICOMOS フランスの会長に就任。カンボジアのアンコール遺跡の保存と修復のため、ユネスコの臨時フランス専門家として活動。また、フランス芸術保護財団財団にも携わっている。



ジャン・フランソワ・ラグノ

1980年に建築士資格を取得し、歴史的記念物主任建築家を経て、歴史的記念物総監査官となる。その後、フランス全土（フランス西部、パリの大規模建築物、南東部など）さらには、ローマ、リスボンなどで、歴史的建造物の監修を行う。現在も、自身の建築事務所で数多くの修復・改築プロジェクトに携わっている。2015年から2021年までICOMOS フランス会長。



マルティーン・レジェール

2012年から2017年までニースの CEPAM (Cultures and Environments. Prehistory, Antiquity, Middle Ages - UMR 7264) で CNRS 研究部長。2017年9月から2021年12月まで CNRS 生態環境研究所 (INEE) で人間と環境の相互作用を担当する副科学部長に就任。文化遺産科学の専門家として、2019年5月からフィリップ・ティルマンとともに、文化省のアリーヌ・マグニエンとパスカル・リエヴォーと協力して、ノートルダム大聖堂科学ワークショップにおける CNRS の CEO の任務を担当している。



河野俊行（こうの・としゆき）

九州大学理事・副学長・主幹教授（国際私法・国際文化遺産法）、国際イコモス名誉会長。
1958年大阪府生まれ。京都大学法学部卒業。京都大学法学研究科修士課程修了、同博士後期課程単位取得退学。九州大学法学部助教授を経て、1997年から同大学法学研究院教授。主な研究分野は国際私法。国際民事手続法、国際文化財保護法。ユネスコの無形遺産条約の起草専門家会合、文化多様性条約の起草専門家会合のメンバーとして作業にあたる。2011年に国際イコモス執行委員、同副会長を経て、2017年に日本人として初めて国際イコモスの会長に就任した。



フィリップ・ヴィルヌーヴ

2013年からパリ・ノートルダム大聖堂の修復を担当する歴史的記念物主任建築家。当初は、シャラント県、クレューズ県、オートヴィエンヌ県を担当し、その後シャラント・マリタイム県のナポレオン博物館、イル・テクスのアフリカ博物館、サン・ルイ大聖堂、ラ・ロシエル旧港のサン・ニコラ塔、シェヌ塔とランタン塔を、2011年からは、ロワール・エ・シェア県のシャンボール公爵領の建築主任として、迎賓館の建設、フランス式庭園と塔の修復を行った。さらに2013年のラ・ロシエル市庁舎の再建、ロシュフォールのマートル渡橋も担当。2013年、ベンジャミン・ムートンの後任としてパリのノートルダム大聖堂の主任建築家に就任し、ヴィオレ・レ・デュックによる火災時の尖塔の修復を監修した。文化大臣からその地位を認められ、この記念物保全に向けた作業を指揮した。



ダニー・サンドロン

1998年よりソルボンヌ大学文学部 (Centre André Chastel) で中世美術史・考古学の教授を務める。1987年にアーキヴィスト・パレオグラフィアの資格を取得し、「La cathédrale de Soissons」と題する博士論文を執筆。1993年、パリ第4大学ソルボンヌ校にて "Étude architecturale" (建築学的研究) を発表。建築史、特にパリのノートルダム寺院の歴史に関する複数の著作がある。



ベンジャミン・ムートン

建築家 DPLG (1972年)、文学士 (1974年)、エコール・ド・シャイヨー (1975年専攻)、歴史的記念物主任建築家 (1980年)、歴史的記念物総監査官 (1994年)。建築アカデミー会長 (2005年～2008年)、ICOMOS フランス会長 (2000年～2006年)、国際 ICOMOS 副会長 (2011年～2014年)。エコール・ド・シャイヨー名誉教授、同済大学 (上海) 主任教授、ラ・サピエンツァ大学 (ローマ)、ハルンシア大学、アテネ大学、ソフィア大学、モンス大学、トルネ大学、ペンシルバニア大学 (フィラデルフィア) などで客員教授を務める。出版物：「建築遺産の意味と再生 CAPA 2018」共同著作「Stable-Unstable Louvain 1988」[Dictionnaire de l'Urbanisme PUF 2010] l'Ecole de Chaillot CAPA 2012」など。モニュメント誌、ロツジャ誌に寄稿。



向井純子（むかい・じゅんこ）

2001～2016年ブータン王国内務文化省文化局勤務。文化遺産建造物に係る、保全制度の整備、調査記録、保全活用・修理工事計画、人材育成に従事。退任後も、世界銀行コンサルタントとしてブータンの文化遺産建造物の災害リスク管理計画を策定する等、文化局の取り組みを支援するかわら、沖縄の建築遺産の保全に関心をもつ。現在は名古屋市立大学でブータン伝統建築の耐震性向上に係る防災局及び文化局との共同研究 SATREPS プロジェクトに従事。沖縄県建築士会「文化遺産と復元—首里城とパリ・ノートルダム大聖堂」企画展・シンポジウム実行委員会チエア。

講演者プロフィール



高良倉吉（たから・くらよし）

1947年沖縄県生まれ。愛知教育大学卒。文学博士（九州大学）。琉球大学名誉教授。専門は琉球史。国の首里城復元に向けた技術検討委員会の委員長。主な著書に『琉球王国の構造』（1987年、吉川弘文館）、『琉球王国』（1993年、岩波新書）、『沖縄問題—リアリズムの視点から』（2017年、共著、中公新書）などがある。2004年、国際交流奨励賞・日本研究賞（国際交流基金）受賞。

シルヴィ・サグネス

民族学者、CNRS 研究員、Ethnopôle GARAE（カルカッソヌ）所長。彼女の研究は、LAHIC で開発されたプログラムを軸に、現在では Héritages UMR 9022（CYU, CNRS, MC）にてそれらを実施している。“ルーツ”への想像力を探求後、現代人の永続性への欲求に特に注目して、それらを文化遺産や地域アイデンティティの構築といった様々な分野で捉えてきた。（著書に「考古学と先住民民族，ed., CTHS, 2015」、ハビブ・サイティとの共著「グローバル化時代の資本と遺産，ed., PUL, 2012」）。現在は、文化遺産化プロセスにおける重要な時点である「仲介」に焦点を移し、特に様々な世界遺産（カルカッソヌと防衛施設としての山城、ミティ運河、修復時のパリのノートルダム寺院）を考察対象としている。

クローディー・ヴォイセナ

文化人類学者。UMR 9022, Héritages（文化、遺産、創作）及び文化省と連携。特に、過去の想像力、及び現代社会における遺産の位置づけを研究。また、グランゼコールの一つであるエコール・デュ・ルーヴルにおいて、遺産の人類学”を教えている。2019年からは、パリのノートルダム大聖堂修復との関係で文化省と CNRS が立ち上げた科学ワークショップにおいて、「感情／動員」ワーキンググループのコーディネーターを務める。著書に「考古学的想像力」（2008年）、クリスチャン・ホッタンとの共著に「遺産の転換期，遺産専門職の現代的变化」（2016年）などがある。

ジル・ドルーアン

典礼研究所 - パリ大司教代理—ノートルダム大聖堂典礼・文化管理担当



ドミニク・シュナイダー

文学士、法学士、パリ政治学院卒業（1967年）、パリ政治学院都市計画大学院修了（1972年）。Havas 社をはじめとする民間企業でさまざまな役員を務めた後、公共事業・環境省のプロジェクトマネージャーを務める。また、エコール・デ・ボンエシヨセ、コンセイユ・ジェネラル・デ・ボエシヨセ事務局長などを歴任。2015年から2021年まで ICOMOS フランスの事務局長。



ドロテ・シャウイーテリユ

考古学者、文化省文化財主任学芸員、パリ市内での考古学的作業の科学的・技術的管理を担当。フランス歴史的記念物研究所 およびフランス博物館修復研究センターと共同で、2019年4月に発生したパリ・ノートルダム大聖堂の火災で崩壊した遺物の撤去、分類、目録作成の作業調整を担当。UMR 7041 ArScAn に所属、2002年に中世考古学の DEA（高度な研究のためのディプロマ）を取得。2008年から2010年まで国立都市考古学センター長を務めた。



ガスパード・サラトコ

文化遺産科学財団のポストドク研究員。研究テーマは、最広義での「イメージ」を支える記憶、知識及び信仰の関係性。この視点から相互に関連しあう分野を扱う。すなわち、パリ・ノートルダム大聖堂の修復現場とこの建物の素材に関する調査、偉大なキリスト教の物語と共和制の物語の演出、記憶を伝える物・場（彫像、広場、記念物）に影響を与える破壊・保持・解体、がその例である。



パスカル・プリュネ

チューリッヒ連邦工科大学（1982年）を卒業後、エコール・ド・シャイヨー（1987年）、歴史的記念物主任建築家（1993年コンペ）に就任。フランシュ＝コンテ地方、ヴァンデ地方、ロワール＝アトランティック地方、パリ・オペラ座、ヴィラ・サヴォワ（ル・コルビュジエ）などを担当し、都市のコンテキストや歴史的建造物への現代的な介入にも取り組んだ。2015年から2019年まで ACMH 社の会長を務め、現在はエコール・ド・シャイヨーで講師を務めている。フィリップ・ヴィルヌーヴにより、ノートルダム大聖堂学術調査のための関係構築、さらに、内装の修復とヴォールド再建 - 修復のための調査支援を依頼された。

講演者プロフィール



レミ・フロモン

建築家 DPLG (2003年)、DEA (グレードマスター) 建築と都市のプロジェクト (2004年)、シャイヨー・スクールの DSA (2014年)。2016年にカンタル (15) とピュイ＝ド＝ドーム (63) の歴史的記念物主任建築家に任命される。クレルモン・フェランの大聖堂、クレルモン・フェランのシャゼラ宮 (DRAC)、リオムのパレ・ド・ジャスティス (Sainte-Chapelle ducale)、ヴィルヌーヴ・レンブロン城 (CMN)、クレルモン・フェランのサント・アンヌのメンヒルとメンヒル・ドゥ・ラ・サルを担当する。また、パリのノートルダム寺院にも参加。



マリー・エレーヌ・ディディエ

遺産の総合キュレーター、歴史的建造物のキュレーター。1988年からプロヴァンス・アルプ・コート・ダジュールとコルシカ島でキュレーターを務め、2003年まではノルマンディー地方、それ以降はイル・ド・フランスにてキュレーターを務める。キャリアのはじめは、セヌ・エ・マルヌ、ヴァル・ド・マルヌ、エソンヌを担当し、2011年にはイヴリーヌ、パリ市に属する歴史的建造物として保護されているモニュメント、パリ国立モニュメントセンターが管理するモニュメント、パリのノートルダム大聖堂を担当した。2019年4月15日の火災により、地理的にパリに再集中し、パリの12区、18区、19区、20区を全面的に担当。現在は担当する歴史的モニュメントの科学的・技術的管理を行っている。



アレハンドロ・マルティネス・デ・アルブロ

1984年徳島生まれ。スペイン・ナバラ大学建築学科卒業。2010年に日本へ留学。2017年東京大学博士課程修了。工学博士。東京文化財研究所文化遺産国際協力センターを経て、2019年より京都芸文繊維大学デザイン・建築学系助教。研究テーマは木造建築遺産保存の理念と技術に関する国際比較研究。イコモス木の国際委員会委員。著書に『木造建築遺産保存論—日本とヨーロッパの比較から』(中央公論美術出版、2019)、『文化遺産と〈復元学〉—遺跡・建築・庭園復元の理論と実践』(共著、吉川弘文館、2019)など。2019年度日本イコモス奨励賞受賞。



岡橋純子 (おかはし・じゅんこ)

聖心女子大学准教授 (国際文化協力) ユネスコにて各国の文化遺産保全政策支援 (2002-2011)。ユネスコ本部文化局世界遺産センターのプログラム専門官として、とりわけアジア地域での世界遺産保全管理計画策定やアフリカ地域での世界遺産定期報告取りまとめに従事する。国際文化協力論、文化遺産学を専門とし、特にユネスコで採択された国際条約 (世界遺産条約、文化財不法輸出入禁止条約、無形文化遺産条約等) の多国間ガバナンスと遺産保全現場の状況・ニーズとの相関性の考察と適合性の見直しに、概念研究とフィールドワークの双方から取り組んでいる。東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻 (フランス) 博士課程修了。博士 (学術)。



ジャン・ルイ・ジオルジュラン

フランス陸軍大将。2002年10月25日から2006年10月3日まで共和国大統領私設参謀長、2006年10月4日から2010年2月24日まで国軍参謀長、2010年6月9日から2016年8月31日までレジオン・ド・ヌール大法官を務めた。2019年、エマニュエル・マクロン大統領は、彼にパリのノートルダム大聖堂の再建の監督を託し、現在は、ノートルダム大聖堂の保存と修復を担当する公的機関の会長を務める。